

## 19世紀日仏における多言語対照辞典の研究

—『五方通語』と『仏英和辞典』—

飯 田 史 也  
(第四部教育科)

### I. はじめに

18世紀中葉の日本では、八代將軍徳川吉宗の西洋學術書の研究奨励などを契機として、自然科学を中心とした蘭学の進展がもたらされた。蘭学の進展は必然的にオランダ語の学習動機を高め、天明8年(1788)の大槻玄沢による『蘭学階梯』、寛政8年(1796)の稲村三伯による『波留麻和解』、さらには文化8年(1811)のオランダ商館長ヘンドリック・ドーフ(Hendrik Doeff)による『ゾーフ・ハルマ』などのオランダ語辞典・参考書が編纂された。さらに蘭学は、自然科学の知識のみならずヨーロッパの社会制度や政治体制の発見理解をもたらし、新たに英学、仏学といった諸分野を誕生させながら、西欧全体の学問を総合的に対象とする「洋学」への発展をみた。一方で日本の洋学はアジア進出をもくろむ西欧列国の対日施策とも無関係ではいらなかった。たとえば19世紀初頭には二つの対外的事件が、日本におけるオランダ語以外のヨーロッパ言語学習の必要性を呼び起こした。その一つは1806年10月に、ロシア海軍のフヴォストフ(Khvostov)大尉率いるフリゲート艦二艦が、サハリンなどの日本人村落を襲った事件である。これはその2年前に国務大臣レザノフの対日通商要求が拒絶されたことを受けた武力行使による強硬手段であった。フヴォストフはこのとき強硬に通商を求める文書を残したが、それがフランス語で書かれており、読解できる日本人がいなかったため、長崎奉行を通じて、ヘンドリック・ドーフに蘭訳が要請された。この事件をきっかけにして文化5年(1808)、長崎の通詞ら6名が、ドーフについてフランス語の学習を開始することになった。<sup>1)</sup>さらに同年8月には、オランダ船を装ったイギリス船「フェートン(Pheaton)」号が長崎湾に侵入したのをきっかけに、長崎通詞たちに対してはフランス語学習を中断し、英語を学習するよう幕命が下された。長

崎通詞たちの英語、フランス語学習の成果は、文化11年(1814)の英語辞書『諸厄利亜語林大成』十五巻や、その後に編纂されたフランス語辞書『弘郎察辞範』四巻、『和仏蘭対訳語林』五巻(いずれも成立年不詳)として結実した。<sup>2)</sup>当初の英学や仏学において英語やフランス語の習得をめざした日本人は、既習のオランダ語を手がかりにする場合が多かったが、こうしたなかでいくつかの多言語対訳辞書が編纂されていた。本稿では、これらの対訳辞書のうち19世紀中葉に刊行されたふたつのものを取り上げて、その記述内容を比較検討し、こうした対訳辞書が当時の外国語習得のなかでどのような役割を持っていたのかを検証したい。さらにこうした原初的な辞書を検証することで現在の日本語教育や日本語辞書に対するなんらかの示唆を得たい。今回取り上げるのは村上英俊(1811～1890)の『五方通語』(1857年)<sup>3)</sup>とメルメ・カション(Mermet Cachon)(1828～1871か)の『仏英和辞典』(*Dictionnaire Français-Anglais-Japonais*)(1866年)<sup>4)</sup>の二冊である。このうち、村上英俊の『五方通語』は、日本語とフランス語、英語、オランダ語、ラテン語の対照辞書であり、カションの辞書はフランス語、英語、日本語の対照辞書である。これら二冊は日本人の手によるものと、フランス人の手によるものであり、その編纂の方法に、それぞれの特徴が見いだせると考えられる。

### II. 村上英俊とメルメ・カション

19世紀後半の仏学者であった村上英俊については、日本仏学史学会の高橋邦太郎、富田 仁、西堀 昭諸氏<sup>5)</sup>によってすでにまとまった研究がなされている。よって、ここでは諸氏の先行研究を参考にしながら、まず村上英俊がフランス語辞書編纂に至る経緯を跡付けておきたい。

村上英俊は、文化8年(1811)に下野国那須郡佐久間に生まれ、江戸に出て宇田川榕庵より蘭学

を学んだ。その後天保12年(1841)には信濃国松代に移り、松代で佐久間象山の知己を得たが、村上が仏学に携わった契機は象山との交流から得られたものである。村上是『五方通語』の他に、『三語便覧』(1854か)、『佛英訓辨』(1855)、『佛蘭西詞林』(1857)、『英語箋』(1857～1863)、『佛語明要』(1864)、『佛蘭西答屈智幾』(1867)、『明要附録』(1870)、『西洋史記』(1870)、『三國會話』(1872)など、フランス語を中心に何冊かの語学書を著した。<sup>9)</sup>

村上が松代に移った翌年、象山は、海防施策としての砲台設置と大砲鑄造の必要性を藩に具申した。村上はこの時、大砲に使う火薬の製造について象山から諮問を受け、当時ヨーロッパで高い評価を受けていたスウェーデンの化学者ベルセリウス(Jöns Jakob Berzelius)の“*Lareboki Kemien*”(和名『化学提要』)を購入することとした。村上は当初『化学提要』のオランダ語訳を発注したが、誤ってそのフランス語訳版が届き、村上はフランス語の読解を余儀なくされた。かくて村上は嘉永元年(1848)より2年間、フランス語学習に没入した。<sup>7)</sup>村上がフランス語の学習を開始したときには、ヘンドリック・ドゥーフの滞日時期からみて、すでに先述の長崎通辞達による『仏郎察辞範』と『和仏蘭対訳語林』の編纂から、およそ30年ほどが経過していたと考えられるが、村上はオランダ語によるフランス文典を用い、独習でフランス語を習得しようとした。これは村上が、『仏郎察辞範』や『和仏蘭対訳語林』の存在を知らなかったか、あるいは松代在住という地理的なハンディキャップから、これらの辞書に接触することが困難だったのではないかと推測される。また日本でのフランス語学習は、長崎の通辞たちが、その後フランス語辞典を編纂したとはいえ、先述のようにフェートン号事件をきっかけに英語学習に切り替えられていたことなどもあり、広く普及発展することはなかった。これらのことから、村上自身も他のフランス語研究者と共に情報を提供し合うといったことができず、独学を余儀なくされた。村上は、フランス語独習の後、そこで習得したフランス語力を生かして上記の諸書籍を編纂した。さらに安政6年には蕃書調所教授手傳となり、その蕃書調所では翌万延元年(1860)から正式にフランス語研究が始められた。また、この後幕末から明治期にかけて、万延元年には松園梅彦の『五國語箋』、明治元年には桂川甫策の『英佛単語便覧』、明治9年には曲木如長の『佛伊和三國會話』、明治14年には西周、菊野七郎他

の『五國対照兵語辞書』など、『五方通語』と同じ形式を持つ複数言語対照辞典が相次いで刊行された。<sup>9)</sup>

その具体的な形式は後に考察するが、村上の『五方通語』や『三語便覧』は、日本語を見出し語とし、それぞれの見出し語に各国語の単語を対応させる形式が取られている。したがって『五方通語』については、和→仏・英・蘭・羅辞典と言えるものである。『五方通語』には当時他に類例を見ないラテン語が一つの言語として扱われている。これについては仏学者であった村上が、とくにフランス語の語源的な関心から、ラテン語を付記したとも考えられるが、日本仏学史学会などでもなお確固とした理由は考察されていない。

一方のメルメ・カシオンは、1828年フランスのレ・ブーシュに生まれ、1852年パリ外国宣教師に入った。外国宣教会神学校で研修ののち、1855年2月香港経由で那覇に到着したが、首里王府により監禁された。外国宣教会の宣教師は、現地の言語を習得しつつ、布教活動にあたることを目的とするが、カシオンはこの監禁生活中に少しずつ日本語を習得したとされている。<sup>10)</sup>同年11月24日、フランス政府はフランス海兵隊の武力威圧によって、琉球との間に琉仏修好条約を締結させた。その後カシオンは病氣静養のため一度香港に帰ったが、1858年、フランス政府が日仏修好通商条約締結のためルイ・グロ(Louis Gros)全権公使を派遣するにあたり、その通訳に任命された。<sup>11)</sup>カシオンの日本語学習の成果が、ある程度のレベルにまで達していたことを知ることができる。日仏修好通商条約は同年9月に調印され、カシオンはルシェヌ・ド・ベルクール(Duchesse de Bellecourt)駐日総領事の通訳として、翌年再来日した。その後カシオンは開港直後の箱館に派遣され、1860年頃に、箱館で日本人のためのフランス語学校を開設したとされている。<sup>12)</sup>その時の教え子には、1862年竹内保徳遣欧使節団のフランス語通訳官や横須賀製鉄所詰訳官となった立広作や、<sup>13)</sup>1864年池田長発遣欧使節団と1865年柴田剛中遣欧使節団のフランス語通訳官のほか横浜仏語伝習所助教、明治4年岩倉使節団外務大記となった塩田三郎らがいた。またカシオンは箱館在任中に、箱館奉行所の役人であった栗本鋤雲と日本語とフランス語の交換教授を行ったり、『アイノ起源 言語 風俗 宗教』(1863年)や、上垣守国の『養蠶秘録』を仏訳した『日本養蠶論』(1866年)を刊行した。本稿で考察する『仏英和辞典』もこの時期に刊行された。このようにカシオンの日本



典』は、その第一部（A～E）のみが刊行され、F項以降は刊行されなかった。

### Ⅲ.『五方通語』と『仏英和辞典』

『五方通語』には和綴3冊本であり、その奥付には、安政4年（1857）5月に、江戸日本橋通二丁目山城屋佐兵衛と江戸浅草茅町二丁目須原屋伊八によって発行されたことが記されている。村上は、その凡例で

一、此書ハ国語イ依テ洋語ヲ検査スル為ニ編輯セリ  
 全ク初学ニ便利ヲ欲シテナリ 故ニ伊呂波  
 四十八字ノ順次ニ倣テ序次ヲ為ス 因テ每字ニ  
 門ヲ別ツコト左ノ如シ

と記し「天文」・「地理」・「時令」・「宮室」・「人品」・「家倫」・「官職」・「身体」・「神仏」・「器用」・「衣服」・「飲食」・「文書」・「錢穀」・「采色」・「人事」・「動物」・「植物」・「言語」の19項目をあげている。つまり『五方通語』の形式は、各語をイロハ音順に並べ、さらにその各音を19の項目に分けて記述しているのである。なお3巻のうち、巻之一が（伊之部～波之部）、巻之二が（仁之部～土之部）、巻之三が（知之部～遠之部）となっており、イロハのワ以降の項目がない。これについて村上は、『五方通語』の続編を計画していたのかもしれないが、先行研究でも確固とした考察はなされていない。

この19の分類項目について村上は、「此書 名物ノ称 多クハ柴小輔ガ雑字類編ニヨレリ」と述べ、柴貞毅小輔重修の『雑字類編』七巻二冊（1824年か）に依ったことを明らかにしている。これらの項目のうち現在の用語から推測しにくいものを「イ」項において検証してみると、「時令」は「上古（イニシヒ）」、「今世（イマノヨ）」、「終歳（イチネンジュウ）」、「一夜（イチヤ）」、「常日（イツモ）」、「終身（イツセウ）」などのことばが見出し語に掲げてあり、時間関連語の項目である。また「官室」は「砲台（イシビヤノヤグラ）」、「室・家・屋」・「柱礎（イシズヘ）」など家屋に関連する用語の項目である。また「人品」は「皇長子（イチノミヤ）」、「醫・醫生・醫人（イシャ）」、「鑄工（イモノシ）」、「石工（イシヤ）」、「田舎漢・村漢（イナカモノ）」、「蕃客・蕃人・外国人・舶客（イコクジン）」などの、職業や人間の属性に関連する項目である。また「家倫」では「従兄弟（イトコ）」、「妹（イモト）」など家族親族の名称を取り上げている。さらに「器用」では、「印章（イン）」、「色紙（イロガミ）」、「兵艦・戦艦・閩艦（イクサブネ）」などの物品や機械の名称をとりあげてい

る。このほか「文書」、「錢穀」、「采色」は、それぞれ書籍、印刷、金銭、色彩に関わる項目であり、さらに「人事」では「地望・門望・門地（イエガラ）」、「許婚（イヒナツケ）」、「教閲・操練・差練（イクサノナラシ）」、「詐冒（イツワリ）」などの人間の社会的活動、人間の相互関係などを表わすことばが掲げられている。また村上は、凡例のなかで、

一、近頃洋学日月ニ盛ニシテ専ラ世ニ行ル 顧ニ後世ノ者必ス洋文ヲ作ルニ至ランカ 然シテ学者其洋文ヲ作ルニ臨テ二語ヲ遺忘スルトキハ必ス其洋文ヲ作り得ル事能ハザル可シ 誠ニ遺憾ニ非スヤ 其時ニ当テ此書座右ニ在ルトキハ国語ニ因テ其語ヲ探リ得ル事最モ易シ故ニ其文作り得ベシ 若シ彼字書ニ因テ求ルトキハ其語ヲ探リ得ルコト容易カラズ徒ニ時日ヲ費シカ 是ニ由テ此書ヲ作りテ以テ洋学者作文ノ一助ト為ス 余ガ著述ノ意ハ全ク此ニ存スト云爾

（下線引用者、以下同じ）

と述べている。村上はここで、「彼字書」（ここではヨーロッパで出版された言語辞典、あるいは外国語→日本語辞典等の意）は対象の外国語を日本語に翻訳するためのものであり、そうした辞書は外国語によっての作文には向かないとしている。村上はそうした作文にあたってこそ『五方通語』が有益なのだとし、「此書ハ国語ニ依テ洋語ヲ検査スル為ニ編輯セリ」と述べて、その役割を（和→仏・英・蘭・羅）辞典に限定している。

『五方通語』の特色としてはさらに、漢籍における各語彙の由来が添えられていることがあげられる。ただしそれはすべての語彙に亘ってではない。これについて村上は「（前略）語ヲ集メ記シ且漢読アル者ハ引挙シテ語後ニ之ヲ附録ス故ニ覽者（中略）西洋ノ四邦語ヲ知ル而已ナラズ傍ヲ漢ノ故事物原ヲ燦然トシテ明ニ知ルベシ」と記している。例えば先にあげた「兵艦・戦艦・閩艦」については、

〔裨編〕墨子曰 公輸般自魯之楚。為舟戰之具。謂之鉤拒。此戰舟之始也

〔普書〕武帝謀伐吳。詔王濬修舟艦。濬乃作大船。（後略）

とその由来を記述している。村上は、日本語見出し語の外国語訳を伝えるだけでなく、その付録として漢語の意味を知らしめることを目的と考えているが、各語彙の由来の添付は、むしろ日本語見出し語の概念を明確化するのに役立ったものと考えられる。しかし見出し語概念の明確化は、逆にその意味を限定してしまうという欠点を持つ。例

えば、上記の「兵艦・戦艦・闘艦」の場合に、墨子や武帝時代の「戦舟」や「舟艦」と、その訳語としてあげられたフランス語の *vaisseau de guerre* や英語の *ship of war*<sup>15)</sup> とでは、その概念が大幅に異なる。すでにこの時代のヨーロッパの軍用艦船は、蒸気機関を持ち、大型の対地対艦砲を搭載した高性能艦が一般的であり、大きさ、戦闘能力、巡行能力などにおいて中国や日本の「兵艦・戦艦・闘艦（イクサブネ）」概念をはるかに凌ぐものであったからである。しかし「戦舟」や「舟艦」として、日本語見出し語の概念が固定されてしまうと、ヨーロッパ列国海軍の高性能艦船はイメージしにくい。

こうした意味解釈の齟齬は、村上の例でいえば「宮室」・「人品」・「神仏」・「器用」・「衣服」・「飲食」・「采色」・「人事」など、単語の意味内容にその国の文化や生活習慣や文明の発達レベルが反映する項目において発生しやすい。逆に「天文」・「地理」・「時令」・「動物」・「植物」など、単語の意味範囲に異言語間の差異の少ない項目では発生しにくいと考えられる。

異なる言語において、対応する二つの単語は、その意味範囲が同一であるとはかぎらない。つまり一つの単語の意味は、別の言語のほぼ同じ意味をもつ単語に必ずしもそのまま重なり合うわけではない。図 1—(1)のように、A 言語の a という単語と B 言語の b という単語の意味範囲がほぼ同じ大きさであっても、その重なり合う部分が一定範囲に限られる場合もあるし、図 1—(2)のように、a の意味範囲がより大きくて、b の意味範囲を包摂してしまう場合もある。図 1—(1)、図 1—(2)においては、ab が重なり合う白抜きの範囲で

のみ、一対一の意味の交換が可能であり、逆に着色部分では意味解釈の齟齬が生じやすい。このうち前者は、文化や生活習慣の相違から派生しやすく、後者は、産業や科学技術など文明の発達段階の相違から派生しやすい。上記の「兵艦・戦艦・闘艦」は、図 1—(2)の事例であるといえよう。

文化や生活習慣の相違から、図 1—(2)の事例が派生することもある。かつて鈴木孝夫は、日本語と英語とマレー語とを比較し、(H<sub>2</sub>O) を著す単語の意味範囲がこれらの 3 ヶ言語では異なることを指摘した<sup>16)</sup>。鈴木によると、日本語では (H<sub>2</sub>O) で示される物質をその温度や様態によって「氷」「水」「湯」の 3 つの単語に言い分けるが、英語では ice と water という 2 つの単語しかなく、hot water と形容詞で修飾しないかぎり「湯」を表すことができないという。さらにマレー語では「氷」も「水」も「湯」も一様に *ayër* という一つの単語で表現されるという<sup>17)</sup>。鈴木はこの指摘を図 1—(2)にあてはめると、英語の water やマレー語の *ayër* が単語 a にあたり、日本語の「氷」や「水」や「湯」が単語 b にあたる。

次に、図 1—(1)の事例をあげてみよう。日本語の「足」と、英語の foot とは、共に身体部位を表わす意味範囲において共通する。しかし日本語の「足」には、例えば「足が遠のく」、「ストで足が奪われる」のように、「出かけること」を表わしたり、「足が強い」などのように粉や餅の粘りやこしの強さを表わすことがある。こうした用法は英語にはない。一方英語の foot は、foot of the mountain など山のふもとを表わしたり、詩歌における韻脚の意や、歩兵 (infantry) の意を表わすことがある。日本語にはこうした用法はない。

#### ＜図 1＞ 異言語間の単語の意味範囲

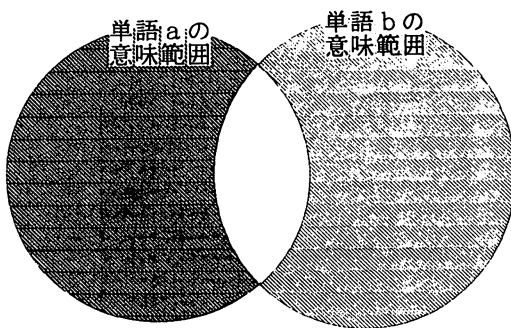


図 1—(1)

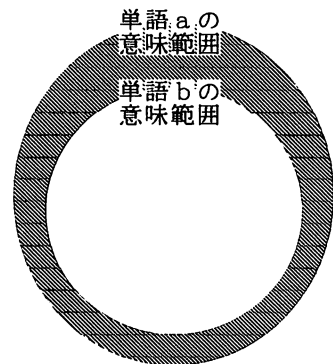


図 1—(2)

〈表1〉 外国語辞書において単語の意味範囲の解説が必要な言語

辞書の種類	学習者の母語	学習対象言語	単語の意味範囲の解説が必要な言語
(第一言語)			
A 語 → B 語	A 言語	B 言語	B 言語
A 語 → B 語	B 言語	A 言語	A 言語
B 語 → A 語	A 言語	B 言語	B 言語
B 語 → A 語	A 言語	A 言語	A 言語

異なる言語の単語を対応させる場合には、上記のような意味解釈の齟齬を防ぐために、単に A 言語の単語を単純に B 言語の単語に置き換えるのではなく、同時に B 言語からも意味範囲を検証してその補正を行わなければならない。<sup>18)</sup>したがって、A 言語を母語（あるいは第一言語<sup>19)</sup>とする B 言語学習者が使用する A 語 → B 語辞書の場合には、対象とする B 語単語についての解説や補足を付記しなければならない。この学習者は A 言語の単語の意味範囲は既に認識しているので、意味範囲の解説は B 言語についてなされるべきなのである。一方、B 言語を母語とする A 言語学習者のための A 語 → B 語辞書の場合では、同じ A 語 → B 語辞書であっても、A 語単語について、解説や補足を付記しなければならない。したがって、例えば A 語 → B 語辞書を編纂する場合には、〈表 1〉のように、対象とする学習者の母語が、A 言語、B 言語のどちらであるかを考慮しなければならない。この問題については結語で再考する。

村上の『五方通語』では、訳し出された仏・英・蘭・羅の各単語には補足や解説は付記されていない。また『五方通語』に先行して発行された『三語便覧』では、外国語単語にはその読みの仮名ルビが振ってあったが、<sup>19)</sup>『五方通語』の単語にはルビは振っていない。

『五方通語』は村上自身が表明したように日本人が外国語で作文するための辞書であったが、そのためには、漢籍よりはむしろ仏・英・蘭・羅語の解説が必要だったのではないかと考えられる。

村上は、『五方通語』編纂後の安政 6 年 (1859) に、蕃所調所教授手伝に任じられた。蕃所調所では、翌万延元年 (1860) から、小林秀太郎、多門祐三郎、岩間久之、吉田西三郎の 4 名がフランス

語学習を開始した。<sup>20)</sup>村上は蕃所調所在任中の元治元年 (1864) に、先述の『佛語明要』4 巻を刊行した。村上は慶応 3 年 (1867) 蕃所調所から改称された開成所を辞し、江戸深川猿江町に、仏語塾「達理堂」を開いた。「達理堂」には中江兆民、加太邦憲、濱尾新、栗塚省吾、土屋政朝、小林鼎、林正十郎、ら 400 人以上の門人が在籍していたとされている。<sup>21)</sup>その後村上是、前述のような何冊かの語学書を著した。

村上是は、明治 23 年 (1890) に 78 才で没したが、現在も、日本のフランス学の始祖として、一定の評価を得ている。

一方、カシヨンの『仏英和辞典』(*Dictionnaire Français-Anglais-Japonais*) は、1866 年パリのヤコブ (Jacob) 通りのフィルマン・ディド (Firmin Didot) 兄弟社から発行された。カシヨンの辞書には解説は付けられておらず、フランスの日本学者レオン・パジェス (Léon Pagés) の巻頭言だけが添えられている。パジェスは、自身も 1868 年に『和仏辞典』(*Dictionnaire Japonais-Français*) を刊行している。パジェスの巻頭言によれば、カシヨンの『仏英和辞典』の第 2 巻は 1867 年に刊行される予定であった。また英語部分の記述については、フランス極東艦隊のル・グラ (Le Gras) 少佐の助力によったことが述べられている。

19 世紀中～後期のフランスでは、日本研究の学問が誕生し、隆盛した。また 1858 年の日仏修好通商条約締結以降は、先のパジェスのほか、レオン・ロニ (Léon de Rosny) など著名な日本研究者が輩出した。このうちロニは、1863 年からパリの東洋語学校に日本語講座を解説し日本語教育に携わった。<sup>22)</sup>また 1873 年にはパリで第一回国際東

洋学会議を開催した。<sup>23)</sup>カシヨンの『仏英和辞典』はこうした時代背景のなかで編纂された。

『仏英和辞典』の形態は、写真 2 に示すように、アルファベット順にフランス語の見出し語を配列し、その下に対応する英語を記している。フランス語単語には品詞が示され、名詞には男性名詞・女性名詞の別が示されている。日本語訳は右欄に掲げられているが、日本語訳にはアルファベットで発音が付されている。

『仏英和辞典』は、フランス語を母語とする学習者のための日本語辞書であるが、カシヨンの日本語発音表記は必ずしも正確で明確なものではない。例えば、(Consommer) の訳語として示された「用ル」の表記は [Motkiourou] となっている。19 世紀中期の日本語の発音は、現在の発音と多少異なる可能性もあるが、カシヨンの発音表記で [モチウル] と発音するには、当時の日本語学習者には困難だったと考えられる。このようにカシヨンの発音表記は難解でまたいくつかの誤謬も見られる。しかし日本人のフランス語学習者には、日本語の発音表記は必要ない。訳語の漢字表記だけで理解可能だからである。また見出し語のフランス語単語には品詞名やジェンダーが付されていることから、『仏英和辞典』はむしろ日本人フランス語学習者にとって利用しやすい辞書だったのではなかろうか。その具体的な記述内容の一例を見てみよう。

『仏英和辞典』225 頁には、見出し語として [Consoler] と、それをめぐる 3 つの関連語が以下のように掲げられている。

[Consoler] V. a. To consol, to comfort.

慰メル

Nagousamerou.

[Consolant, e.] adj. v. Consoling, comfortable.

慰メル者

Nagousamerou mono.

[Consolateur] s. m. Consoler, comforter.

心ヲ慰メル人

Cocoro-o

nagousamerou hito.

[Consolation] s. f. Consolation, comfort.

慰サメ

Nagousame.

Donner des —s. To give comfort.

慰ヲ考イル

Nagousame-o

ataierou

San —. Comfortless.

慰メナキ

Nagousame naki.

このうち日本語訳の「慰サメ」と「慰ヲ考イル」の二者だけは、他と送り仮名が異なる。さらに「慰ヲ考イル」については「慰ヲ与エル」の表記ミスとみられる。また形容詞である [Consolant, e.] に、「慰メル者」という訳語が充てられているが、適切ではない。一方で、同じ形容詞でも [Constant] には「常ノ」、[Constituant] には「組立ル」「形ヲナス」などが充てられており、こちらは形容詞の訳語としてほぼ適切である。

日本語訳語の表記の誤謬や不統一は、他の言語を母語とする日本語学習者には混乱を引き起こす恐れがある。しかし日本人のフランス語学習者にとっては、語の意味さえ適切に訳し出してあれば、日本語の表記の誤謬や不統一はさしたる障害とはならない。その訳語を自身で適当に補正して理解するだけの日本語力を持っているからである。この点でもやはり『仏英和辞典』は、フランスの日本語学習者よりも、むしろ日本のフランス語学習者が利用しやすい辞書だったのではなかろうか。

以上の観点からこれら二つの辞書を対比してみると、村上の『五方通語』では語彙検索機能に重きが置かれ、またカシヨンの『仏英和辞典』では学習機能に重きが置かれていることがわかる。

『仏英和辞典』のように、例えば「慰める」という一つのことばについて、その名詞型や形容詞型などいくつかの関連語を挙げることは、学習機能に重きを置いた辞書においてはきわめて有効な方法である。学習者が構造的に語を習得することができるからである。他方、村上の『五方通語』では、動詞や形容詞や副詞などの用言は「言語」の項目で扱われているが、日本語単語と外国語単語とはあくまで一対一で対応させてあった。つまり一つの見出し語については、そのことばについてのみの 4 言語訳にとどまり、関連語の記述はなされていない。したがって例えば、一定の動詞や形容詞を検索した場合には、その名詞形は改めて他の 18 項目の中から探さなければならない。

『五方通語』は、なんらかの外国語をある程度のレベルまで習得した者でなければ、その有効な利用は困難であつたろうと考えられる。『五方通語』は村上自身がいうように、外国語既習得者が「洋文ヲ作ルニ臨テニ語ヲ遺忘スルトキ」を想定して編纂されていたのである。

#### IV. 結語

『五方通語』と『仏英和辞典』は、日本語が他の言語と本格的な相互交流を持った第二の時期に編纂されたものであるが、<sup>24)</sup>一つの単語の意味範囲は、他言語の単語の意味範囲にそのまま置き換えられるという語彙観のもとに編纂されたきらいがある。これより後、村上は上述のような各種の語学書を編纂していったが、『五方通語』のような多言語対照辞典は編纂しなかった。<sup>25)</sup>先行研究では、村上の『五方通語』までの辞書と、それ以降の語学書とに一線を画し、後者にはっきりとした質的向上を認めている。<sup>26)</sup>一方、フランスでは、とくにレオン・ド・ロニらが多くの日本語辞書、語学書を発刊していった。<sup>27)</sup>このように日本におけるフランス語学と、フランスにおける日本語学とは、19世紀中～後期に着実に発達してゆき、日仏双方で優れた語学書が編纂されていった。したがって『五方通語』と『仏英和辞典』は、「日本語⇄外国語辞書」編纂の揺籃期にあって、後に編纂される多くの語学書の踏み石であった。

そして、こうした原初的な日本語辞書の検証は、それが原初的であるだけに、逆に現在に通ずる問題を浮き彫りにする。

先に検証したように、A語→B語、B語→A語の2種類の辞書において、その意味範囲の説明が必要とされるのは、学習者が学習しようとする言語についてであった。現在の語学学習においても、とくに母語→他言語という辞書で他言語を検索した場合には、われわれは他言語→母語辞書でその語彙を改めて検証することが多い。母語→多言語辞書で検索しただけでは、その単語の意味範囲が明確にならず不安だからである。例えば日本語を母語とする日本人が和英辞書を使用した場合には、検索した英単語を英和辞書で再度検証する。この作業により、学習しようとする単語の意味範囲を、母語単位の意味範囲との関係で捉えることができるからである。つまり、図1—(1)、図1—(2)で示した着色部分の範囲を確認することができるのである。

現在、日本語を学ぶ外国人が使用する日本語→

母語辞書と母語→日本語辞書の多くは、日本で日本人学習者のために編纂されたものである。その言語を母語とする学習者を対象とした日本語→他言語辞書と、他言語→日本語辞書は、特定の言語のものを除いては、いまだほとんど開発されていないのが実状である。日本人学習者のための辞書には、相手言語の特殊な表現や言い回しについての解説が付されているが、日本語学習者にとっては、母語についてのそうした解説は必要ではない。カシヨンの辞書における日本語訳に、若干の誤謬や不統一があっても、日本人フランス語学習者にはさしたる障害とはならないのと同様である。逆にこうした辞書に日本語表現についての解説の少ないことが、日本語学習者にとっての障害となるのである。

また、われわれが一つの言語を学ぶ場合には、他言語→母語辞書の使用頻度が高く、母語→他言語辞書の使用頻度は低い。このため、日本人学習者のための辞書についていえば、一般に日本語→他言語辞書は他言語→日本語辞書に比して種類が少なく、また内容の充実度も低い。これを日本語学習者の立場からみると、使用頻度の高い日本語→母語辞書の充実度が低いことになる。<sup>28)</sup>日本語を母語としない日本語学習者のための日本語→他言語辞書や他言語→日本語辞書、あるいは上級者向けの日本語→日本語辞書等の開発が望まれる。<sup>29)</sup>

先述のように、村上やカシヨンの時代は、日本語がヨーロッパの言語と本格的に相互交流を持った第二の時期であった。二つの辞書に取り入れられた方法には、現在から見ると不備や欠点が多いが、それは日本語と他言語とをなんとか橋渡ししようとする日仏双方の工夫の表れであった。国内のあらゆる分野で「国際化」が喧しく叫ばれ、西暦2000年までに日本に10万人の留学生を受け入れようとしている現在は、日本語が他言語との相互交流を持つ第三の時期であるといえよう。その対象はいまや世界のすべての言語であるといっても過言ではない。日本語は他言語との新たな相互交流の態様を求められているのである。

## V. 註

- 1) 富田 仁『フランス語事始—村上英俊とその時代—』日本放送出版協会、1983年、参看。
- 2) 同上書参看。
- 3) 村上英俊『五方通語』（復刻、カルチャー出版、1975年）。
- 4) Mermet de Cachon, "Dictionnaire Français-Anglais-Japonais", Firmin Didot Frères, Fils et Cie, 1866.



- 5) 前掲書 1) のほか、高橋邦太郎、富田 仁、西堀 昭編『ふらんす語事始—仏学始祖村上英俊と思想—』校倉書房、1975 年他日本仏学史学会における一連の研究など。
- 6) 高橋邦太郎、富田 仁、西堀 昭編『ふらんす語事始—仏学始祖村上英俊の人と思想—』校倉書房、1975 年、参看。
- 7) 前掲書 1), 57～60 頁。
- 8) 同上書、113 頁。
- 9) 西堀 昭『『五方通語』について』(前掲書(3) 付録)、9 頁。
- 10) 富田 仁『メルメ・カション』有隣堂、1980 年、40 頁。
- 11) 同上書参看。
- 12) 同上。
- 13) 富田 仁編『海を越えた日本人名辞典』日外アソシエーツ、1985 年、365 頁。
- 14) 同上書、292～3 頁。
- 15) ここでは warship や battleship などがむしろ一般的な英単語であろう。村上の記した英訳語、ship of war には、フランス語からの直訳の影響が見られ興味深い。
- 16) 鈴木孝夫『ことばと文化』岩波書店、1973 年。
- 17) 同上書、36～7 頁。鈴木はこうした事例を『日本語と外国語』(岩波書店、1990 年)においてさらに詳しく探求している。
- 18) 個人や集団が二つ以上の言語を使用する場合に、使用能力のすぐれている言語を「第一言語」と呼ぶ。複数の言語が接触する地域や、移民などの場合には「母語」と「第一言語」とは必ずしも一致しないが、記述が煩雑になるため、本稿では「母語」で統一する。
- 19) 前掲書 6), 102 頁。
- 20) 前掲書 1), 113 頁。
- 21) 同上書参看。
- 22) 拙稿「19 世紀フランスにおける日本学の進展—日本語文法書の発達を中心に—」(『福岡教育大学紀要』第 39 号 第 4 分冊、1990 年) 参照。
- 23) 拙稿「1873 年第一回バリ東洋学会議における日本研究—マディエ・ド・モンジョの発表を中心として—」(広島大学大学院教育学研究科『広島大学大学院教育学研究科博士課程論文集』第 13 巻、1987 年) 参照。
- 24) これ以前には、例えばイエズス会宣教師が、16～17 世紀に日本語学書を著すなどして、積極的に日本語との交渉をもっている。これを日本語が漢字圏以外の他言語と本格的な交流を持った第一の時期と考えることができよう。なおこの時期の宣教師の日本語研究については前掲拙稿 22) 参照。
- 25) 多言語対照辞典のメリットとしては、他の並置言語の単語との相関で訳語が安定し、学習者に語彙が定着しやすいことがあげられる。現在の多言語対照辞典には、例えば以下のものがある。  
 ※Paliwal, G. S., "Dictionnaire multilangue, hindi, français, anglais, allemand.", Librairie de l' Inde, 1987. (ヒンディー語・フランス語・英語・ドイツ語対照)  
 ※Streitberg, Wilhelm, "Gotisch-griechisch-deutsches Wörter-buch", C. Winter. (ゴート語・ギリシャ語・ドイツ語対照)  
 ※Oehler, Heinz, & Sörensen, I., "Grundwortschatz Deutsch-Allemand fundamental-Vocabolario base tedesco : German-French-Italian.", E. Klett, 1968. (ドイツ・イタリア語・フランス語対照)  
 ※Oehler, Heinz, "Grundwortschatz Deutsch-Essenntial German-Allemand fundamental : German-English-French.", E. Klett, 1966. (ドイツ語・英語・フランス語対照)  
 ※Harkavy, A. "Yiddish-English-Hebrew Dictionary.", 2nd ed. Schocken, 1988. (イディッシュ語・英語・ヘブライ語対照)
- 26) 前掲書 9), 13 頁。
- 27) 前掲拙稿 22) 参照。
- 28) このほかにも例えば、現在の日本人学習者向けの日本語→他言語辞書のほとんどの見出し語がひらがな表記で、50 音順に配列してあることをあげることができる。これは日本語初習の学習者には馴染みにくい。このため見出し語がローマ字で表記された古いタイプの日本語→他言語辞書を愛用する学習

者が多い。

- 29) 1990 年に研究社よりひらがなでルビのふられた英和辞典が刊行された。日本語学習者のための日本語辞書の、ひとつの方向性を示すものとして興味深い。